

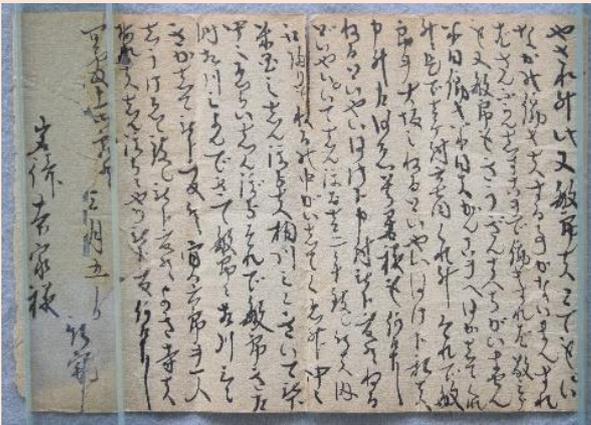
文書番号671 [敬三郎に横文字習わせたくにつき書状] (年未詳) 7月14日 差出: 岩崎甚四郎 宛先: 本家

甚四郎が敬三郎に英語を勉強させたがる理由がこの手紙の内容からうかがえます。

ここでは、敬三郎を学校へ行かせて「よこもじ」、つまり英語を習わせてほしいと富三郎に頼んでいます。その理由は、英語ができて15~6歳にもなれば、アメリカでは1時間で3~5ドル稼ぐ仕事ができるから、ということでした。

甚四郎の過酷な労働の賃金が1日1ドル前後であることを考えると、英語の読み書き、会話の能力が必要とはいえ1時間で3ドル以上稼ぐことができるのは破格といえます。

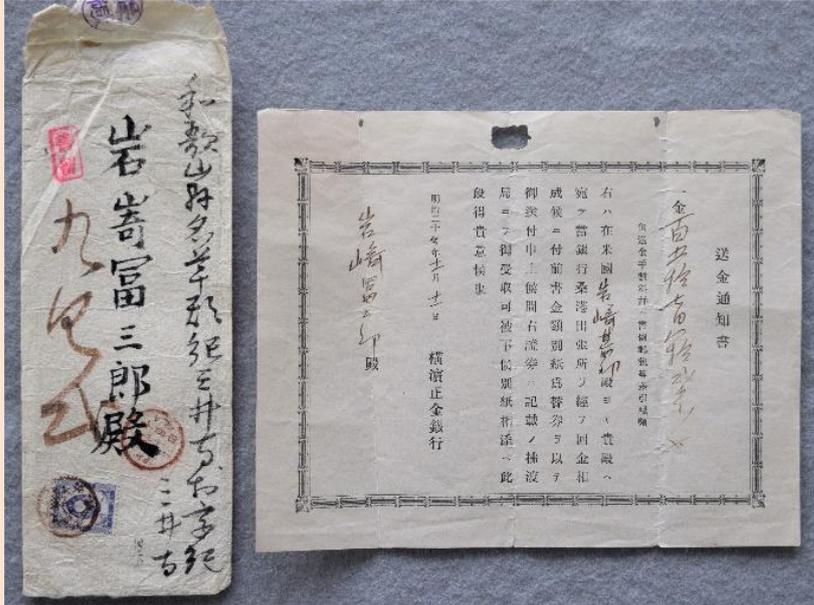
甚四郎自身、過酷な労働を体験していたからこそ、アメリカへ呼び寄せる子供には英語を事前に学んでもらい、より割のいい仕事で多くの金を稼げるようになってほしいと思っていたのかもしれませんが。



文書番号810-25 [主人金子勘定ならびに敏郎、敬三郎、定四郎のことにつき書状] (年未詳) 3月5日 差出: 新宅 宛先: 本家

この手紙では、息子の敏郎、敬三郎、定四郎のうち米国へ呼び寄せる予定の敬三郎と定四郎のアメリカでの生活方法について言及しています。

それは、「さんふらんすこつ」(=サンフランシスコ)であれば、半日は働き、半日は学校で勉強する「スクールボーイ」として生活することができ、この方法だと1か月で6~7ドル稼ぐことができたようです。

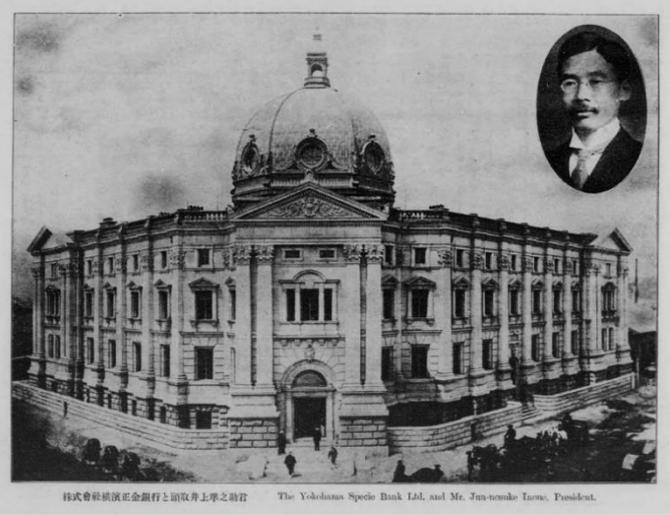


文書番号655 送金通知書 明治26年(1893)11月11日 差出: 横浜正金銀行 宛先: 岩崎富三

横浜正金銀行は、貿易関係の金融や為替などの業務を取り扱った銀行で、当時中国、イギリス、フランス、アメリカなどに支店や出張所を置いていました。

在米の甚四郎から紀三井寺村の岩崎家への送金は、横浜正金銀行桑港(サンフランシスコ)出張所を経由して送られました。この送金通知書は明治26年(1893)11月のときのもので、送金額は約157円です。

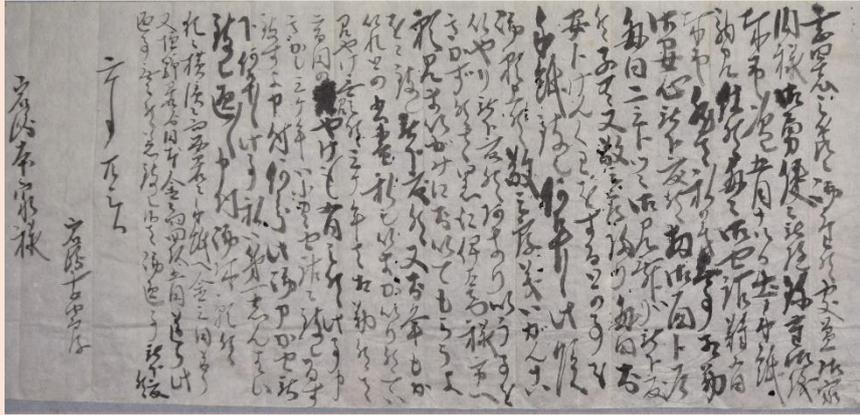
同年の2月にも富三郎宛てに約58円送られた記録が残っており、合計すると1年で少なくとも200円以上の金額が富三郎宛てに送金されていることになります。甚四郎は重労働をしながらも大金をしっかりと稼いで送っていたのです。



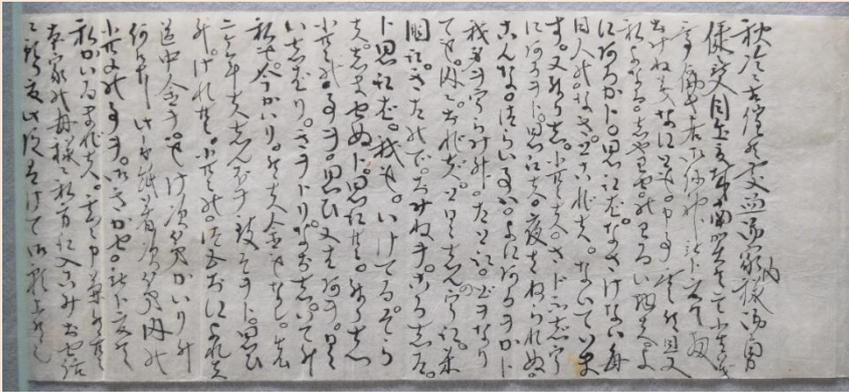
横浜正金銀行 国立国会デジタルコレクション 小林敏信『産業之大日本』、東京商業興信所、1918より

甚四郎は妻お峯と相談のうえで渡米し、お峯と7人の子供たちは紀三井寺村に残りました。しかし、この手紙に書かれているように、お安と敬三郎が毎日喧嘩をしていて大変なようで、お峯は甚四郎に対して帰ってこいと催促しています。

甚四郎もアメリカで大変な思いをしていた一方で、紀三井寺村に残されたお峯には不安や苦勞が多かったのでしょう。



文書番号810-58 [家族近況ならびに西、塩野送金のことにつき書状] (年未詳) 6月23日 差出:岩崎甚四郎 宛先:岩崎本家



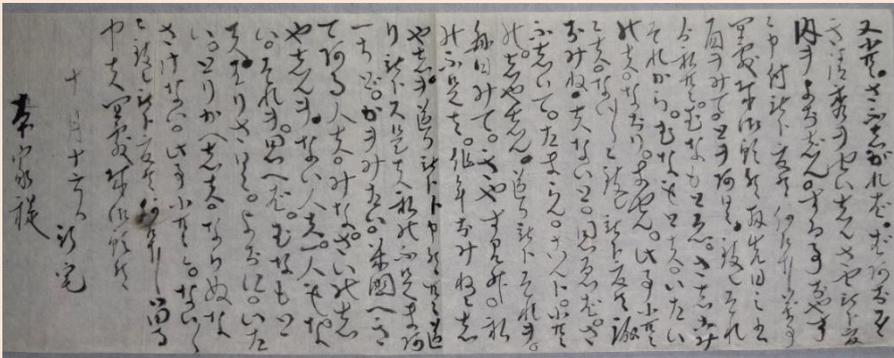
文書番号810-26-1 [お峯死去のことならびに sacramentにて働きにつき書状] 明治26年(1893)9月21日 差出:新宅 宛先:本家

甚四郎がアメリカへ来て1年後の明治26年(1893)9月に、富三郎宛てにしたためられた甚四郎のこの手紙には、「お峯のことは言葉がでない。私のような不幸せな者は世にいるだろうか。毎日人のいない所で泣いている。残された子供たちはさぞ不自由だと思つて夜も寝られない。こんな辛いことは世にあるものかとわが身を恨む」、「アメリカへ来たからお峯を殺してしまったのだと思つて生きている心地がしない」と書かれています。

実は同年7月、お峯が42歳の若さで死去したのです。この手紙は、お峯死去の悲報に対する返事で、お峯を亡くした悲しみと残された子供たちへの心配ごとが書き連ねられています。

別の手紙では、長女のお安に対して、ほかの子供たちを大事にするように、そして小遣いをあげるように言い聞かせてほしいといったことや、お峯の墓石は、本家の父様(富三郎の父平四郎)と同様にして、戒名は私とお峯2人のものを刻んでほしいことを頼んでいます。

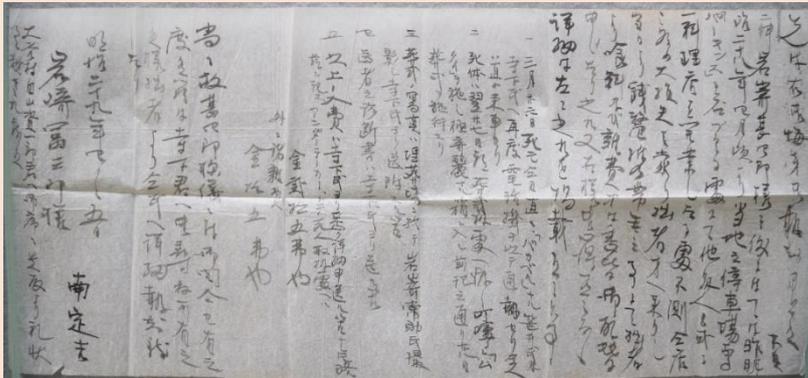
お峯が亡くなったあと、また別の手紙には「お峯がないと思うと寂しくてたまらない。今度子供の写真を送ってもらいそれを毎日見て気休めしたい」、「胸元が張り裂けるように痛い、取り返しがつかないことで情けない。このことは子供には内緒にしてほしい」と悲痛な心情が記されています。



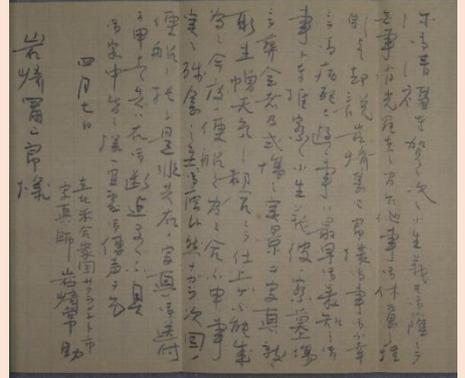
文書番号664 [胸の差し込み痛み、内々に子供の写真をお送りくださったことにつき書状] (年未詳) 10月16日 差出:新宅 宛先:本家

# 甚四郎、アメリカにねむる

お峯が死去してから約3年後、紀三井寺村出身で、サクラメント在住の南定吉と写真師岩崎常助、バカビル在住の寺下安吉という移民たちから、富三郎宛てに手紙が届きます。内容は、甚四郎がアメリカで死去したこと、その葬儀を行ったことを知らせるものでした。



文書番号705 [岩崎甚四郎氏死去経緯につき書状]  
明治29年(1896)4月5日 差出:南定吉 宛先:岩崎富三郎



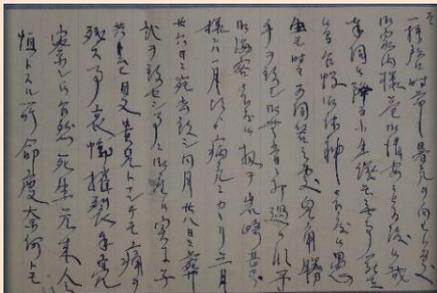
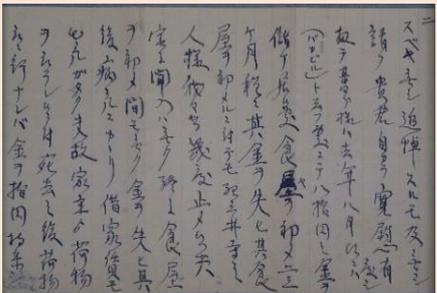
文書番号810-55 [岩崎甚四郎氏葬儀式場写真撮影につき書状]  
明治29年(1896)4月7日  
差出:在北米合衆国サクラメント市写真師岩崎常助 宛先:岩崎富三郎

定吉の手紙には、甚四郎の死去前後と葬儀までの流れ、費用について書き記されています。

甚四郎は、明治28年(1895)4月ごろよりサクラメントにある「パーキンス」という停車場駅で料理店を開業したものの大きな損失を出したため、定吉のもとへ訪れていました。金銭を所持していなかったため、食料と雑費等は定吉が立て替えました。以下、甚四郎が亡くなったあとの経緯について記されており、葬式場への引き渡しと納棺、葬式の実施、埋葬場で岩崎常助が写真を撮影したこと、医師の診断書の送付のことが書かれており、諸費内訳は寺下安吉から知らせがある、と述べています。

南定吉の手紙にも登場した岩崎常助は、サクラメントで写真業を営んでおり、甚四郎の葬儀に参加していました。

甚四郎死去の知らせとともに、墓場での葬儀立ち合い者と式場の様子を写真に撮ったことを富三郎に伝えています。しかしながら天気都合で写真の仕上がりがうまいかざ船便に間に合わなかったため、次の船便で送ることを記しています。



寺下安吉の手紙には、甚四郎が死去した前後の経緯と、葬儀にかかわる費用の詳細について詳しく書かれています。

手紙の冒頭で時候の挨拶を述べたあと、甚四郎がこの年の1月ごろより病気にかかり、3月26日に死去、28日に葬式を行ったことを伝えてお悔やみを述べ、甚四郎死去前後の経緯について書いています。

甚四郎は明治28年(1895)8月ごろバカビルで金を儲けて飯屋を始めたものの、2~3か月でその金を失ったそうです。飯屋の開業については、紀三井寺村出身の人たちが何度も止めましたが、聞き入れる様子はなく結局飯屋を始めるも金は失い、その後病気にかかってしまいました。

借家の家賃が払えなかったため家主には荷物と旅券を取られ、死去したあとにも金を持ってこなければ返してもらえない状況でした。

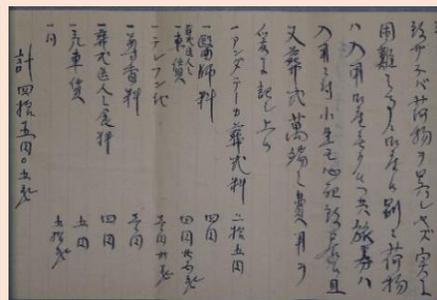
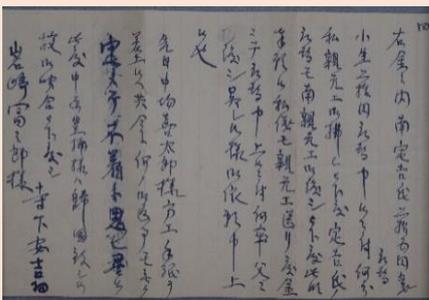
手紙の後半には、安吉が立て替えた諸費用(葬儀費、診断費、葬式送人の交通費、電話代、香典料、食事代)の内訳を記しています。

このように、外国の地で移民が死去したときは、同郷の者や同じ府県出身の者が連絡を取って集まり、協力して葬式を取り仕切りました。その様子を写真に撮り、故郷の家族らへ送る習慣もあったようです。

甚四郎は、48歳でこのような最期を迎えてしまいましたが、故郷を同じくする人たちによって丁寧に供養され、きちんと葬式が行われたことは、残された子供たちや岩崎家、中場家にとっても、せめてもの慰めとなったのかもしれません。

また、ここで多く紹介することはできませんでしたが、甚四郎は、渡米してから同郷の移民たちと交流しながら移民生活を送っており、亡くなったあとに至るまで彼らに助けられていました。

和歌山県出身の移民たちがどのような生活を送ったのかはさまざまですが、日々を過ごしていくうえで和歌山県民同士は助け合っていたのです。



文書番号707-1 [岩崎甚四郎氏死去経緯ならびに葬儀諸費用につき書状]  
明治29年(1896)5月26日 差出:寺下安吉 宛先:岩崎富三郎